

## ハーマンにおける翻訳

宮谷 尚実

(国立音楽大学)

*This paper aims to investigate the concept of translation observed in J. G. Hamann's works, paying special attention to one of his earlier works Aesthetica in Nuce. This makes possible to a better understanding of the significance of the concept of translation, which is inherited by J. G. Herder and Schleiermacher. In order to understand others, it is not enough to transfer them to your own language, but it is necessary to transfer yourself to other languages. In this sense, translation is comparable to the divine act of condescension (Herunterlassung) by God, which Hamann described in his interpretation of the Holy Bible.*

### 1 はじめに — ハーマンの「翻訳論」?

#### 1.1 「北方の博士」ハーマン

「北方の博士」と呼ばれたドイツの思想家、ヨーハン・ゲオルク・ハーマン (Johann Georg Hamann 1730-88) は、体系的な翻訳論を著していない。その点でハーマンの「翻訳論」なるものが存在するかのごとく語ることはまずもって慎重であるべきだろう。だが、彼にとって翻訳が極めて重要な営みだったことは遺された様々な著作から明らかである。ケーニヒスベルク大学での学業を中断して家庭教師となった時期にはすでに 17 世紀フランスの作家ルネ・ラパンやイギリスのシャフツベリー等の翻訳を手がけ、その後、1758 年に回心の体験をしたロンドンからケーニヒスベルクに戻ってからは『ケーニヒスベルク文化・政治新聞』(„Königsbergsche Gelehrte und Politische Zeitungen“) にいくつもの翻訳を寄稿している。その中にはイングランドの文学者サミュエル・ジョンソンの「翻訳論」のドイツ語訳や、スコットランド・エディンバラ出身のディヴィット・ヒュームによる『人間本性論』からの部分訳も含まれている (Patri 1996)。さらにこの時期、1762 年には旧約聖書「雅歌」のヘブライ語からの翻訳も試みていた (Hamann-1 IV, p.251-256)<sup>1</sup>。ただし、この翻訳に関しては、1952 年に J. ナードラーが編集したハーマン著作全集に収録されるまで出版されることはなかった。これらの著作以外にもハーマンは翻訳を手がけていた。1767 年にカントの仲介で得た仕事は、税関でのドイツ語からフランス語への実務翻訳であり、ハーマンはそれ以降生涯のほとんどを税関職員として過ごすことになる。

#### 1.2 ハーマンと翻訳

---

MIYATANI Naomi, "J. G. Hamann's Concept of "Translation", " *Interpreting and Translation Studies*, No.11, 2011. pages 5-13. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

ルターからの強い影響を受け、聖書の熱心な読み手だったハーマンは、新約聖書を自分でドイツ語に翻訳したいという願いも抱いていたようだ。1774年にヘルダーに宛てて書かれた手紙で次のように記している。「新しく、忠実、かつ自由。このように私の新約翻訳はなるだろう。私ならヨハネから始めて、歴史記述家ルカで終わらせると思う」(Hamann-2, III, p.76)。通常であればマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと並ぶ四福音書をヨハネ福音書から始め、ルカ福音書で終えようというハーマンの企てが翻訳作業上の手順のことを述べているのか、あるいは実際の配列を指すのか、この新約聖書翻訳プロジェクトはどうやら実現しなかったため、もはや定かではない。注目すべきは、翻訳の歴史において常にせめぎあってきた逐語訳の「忠実さ」(treu)と意味対応訳の「自由さ」(frei)との両立を自覚しつつ、創造的な「新しい」(neu)翻訳をハーマンも目指していたことだ。

生涯にわたってハーマンの著作には、古今の作家たちの著作から引用したヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語などが原語でドイツ語の地の文に織り込まれており、1762年の『モザイク風エッセイ („Essais à la Mosaique“)](Hamann-1, p.277-297)をはじめとして自身の著作をフランス語で綴ることも少なからずあった。外国語を原語のまま引用することや、自分の著作を外国語で著すこと、これらは二言語間の翻訳とは厳密には異なるかもしれない。しかし、執筆のプロセスでいったん母語へと翻訳して理解した語を原語で地の文に組み込んだり、思考を母語以外の言語で言語化あるいは文字化したりする作業もまた、広い意味での「翻訳」の行為とは言えないだろうか。以上のことを考え合わせれば、啓蒙主義時代の18世紀プロイセンの町ケーニヒスベルクで主に活動したハーマンは、同時代の知識人たちと同様あるいはそれ以上に、母語であるドイツ語の世界を大きく越え、さまざまな言語の翻訳という営為のただ中に生きていたといっても過言ではないだろう。それゆえ、ハーマンが「翻訳」という概念を用いるとき、それは理論的な次元に留まっていたわけではなく、常に彼の実践と連動していた。その点はここでまず強調しておく必要があるだろう。

本論ではハーマンの著作における翻訳概念を、特に初期の著作『美学提要 Aesthetica in nuce』からの一節を中心として見ていくことにする。それにより、ハーマン以降、ヘルダーやシュライアーマッハーへと繋がっていく「翻訳」という概念の持つ意味の広がり確認できるだろう。

## 2 ハーマンの翻訳概念

### 2.1 『美学提要』から

語るとは翻訳することである — 天使のことばから人間の言語へと。(Hamann-1, II p.199)<sup>2</sup>

このパッセージを分析するためには、まずこの文が含まれた著作の成立について確認する必要があるだろう。『美学提要 カバラ的散文のラプソディー』 („Aesthetica in nuce. Eine Rhapsodie in Kabbalistischer Prose“) は、1762年に刊行された論集『愛言者の十字軍行』 („Kreuzzüge des Philologen“) に収められている。ハーマンの著作の多くがそうであるように、手紙における名宛人にあたる直接の対話の相手がこの著作にもまた存在する。この著作が向けられた相手は、ゲッティンゲンの旧約学者ヨーハン・ダーヴィット・ミヒャエリス(1717-1791)である。ミヒャエリスは、ヘブライ語だけでなくアラビア語をも手がかりとして旧約聖書の理解を深めようとするオリエント学者として、また、イギリスの聖書学をドイツに紹介した人物としても高名な存在であった。英国人ロバート・ロースが著した『ヘブライ人の神聖な文学について』を翻訳したミヒャエリスは、その訳者序文で美の判定尺度として人間の理性への信頼を表明した。これに対して疑問を投げかけ、「神を畏れ、栄光は神に帰すべ

し」(Hamann-1, II, p.217)と結論づけるのが、ハーマンの『美学提要』である。<sup>3</sup>

国内外のハーマン研究において、この著作は『美学提要』(„Aesthetica“)と呼び慣わされているが、初版の表題ページ(Lumpp 1970, p203)を見るとひとつの疑問が浮かんでくる。印刷された文字のサイズでは、「ラブソディー」(Rhapsodie)が目立って大きい。次に大きいのは「カバラ的な」(kabbalistischer)であり、その半分ほどの文字サイズで AESTHAETICA. IN. NVCE. (sic!)と印刷されている。ところが、歴史批判版になると、むしろ AESTHETICA. IN. NVCE. (sic!)が一番大きなサイズで印刷されており(Hamann-1, II, p.195)<sup>4</sup>、全集の編纂者ナードラーの恣意的な変更が見られる<sup>5</sup>。ナードラーは、自身が著したハーマンに関する伝記の中で、まさに『愛言者の十字軍行』に収められた個々の作品の表題ページに着目し、この論集のために書き下ろされた『美学提要』(„Aesthetica“)の組み版が最も多彩(bunt)だ(Nadler 1949, p.128)と述べているにもかかわらず、その文字サイズに手を加えた。その結果、原著者であるハーマンも友人リントナー宛ての書簡で、「カバラ的散文のラブソディー」(Hamann-2, II, p.125)と記していたにもかかわらず、オリジナルタイトルにおける重点が「ラブソディー」から「美学」へとずらされ、その結果、「カバラ的散文のラブソディー」はそれ以降、単なるサブタイトルとして扱われてしまうことになった。<sup>6</sup>では、最も大きな文字サイズで強調されていた本来のタイトル、「ラブソディー」とは何を指し示しているのだろうか。

## 2.2 解釈と翻訳

ミヒャエリスは、1750年に新約聖書概説書でパウロの署名がある書簡について、その著者性を批判し、「彼[パウロ]が書いた他の書簡の言い回しを継ぎ合わせたラブソディーに過ぎない」(Lumpp 1970, p.31)と断じていた。この否定的な表現を受けて、ハーマンは自らの書物のタイトルに織り込んでおき、結論部分で再びラブソディスト(狂想詩人)に言及する。本文中ではハーマンは著者である自分のことを「ラブソディスト」と呼び、この語につけた脚注にプラトンの『イオン』からソクラテスの発言をギリシャ語のまま引用する。この引用部分を仮に日本語に訳すと、「— ラブソディストたち — すなわち解釈者の解釈者 —

οι ραψωδοι — ερμηνεων ερμηνεις」(Hamann-1, II, p.217)となる。ここでハーマンがドイツ語の「解釈者」(Ausleger)という語を使わずに、ギリシャ語で「解釈・翻訳」という意味の動詞 ραψωδίαからの派生語をそのまま継ぎあてることによって、この語に含まれる「翻訳」という概念も同時に浮かび上がってくる。つまり解釈とは、このギリシャ語の語源にある伝令の神ヘルメスのように、神々のことばを人間の言語へと翻訳する行為だという含みである。それは原語でギリシャ語の多義性を保ったまま用いることによってのみ可能となる。このプラトンからの引用によって、ハーマンはタイトルに大きく掲げた語「ラブソディー」をミヒャエリスが用いた否定的ニュアンスから解き放つ。彼によれば、解釈や広い意味での翻訳の成果はラブソディーという形をとってこそ現れる。ラブソディーは単なる断片や継ぎ合わせなどではなく、神の啓示を伝える手段として、肯定的に捉え直されることになる(川中子 1996, p.100)。このように、これまでは指摘されてこなかった初版の表紙の文字の組み方にも注目すれば、いわゆる『美学提要』ではそのタイトルから結論部に至るまで、翻訳としての解釈が最大の関心事だと言えるのではないだろうか。すると、「天使のことばから人間の言語への」語りがすなわち翻訳である、というハーマンの一文も、謎めいた箴言などとしてではなく、その大きな文脈のなかで読み取ることが可能となる。これは言うまでもなく二言語間の翻訳について綴られているのではなく、解釈や理

解としての翻訳についての解釈学的パッセージである。再度、この箇所全体を引用する。『美学提要』に関する研究書を著したルンプはこの部分を「(『美学提要』)第1部の頂点」と評価している(Lumpp, op.cit. p.56)。文字サイズに関して、ナードラー版の全集では全て統一されているが、初版では字の大きさで2種類の強調が行われているので、本論ではそこにも着目したい。

(a) 語るとは翻訳することである — 天使のことばから人間の言語への。すなわち、思考をことばへ — ことがらを名称へ — 形象を記号へ。(b)これらは詩的あるいは不可訳的でもあり得るし、歴史記述的、象徴的、象形文字的でも — — また哲学的でも特徴叙述的でもあり得る。(c)この種の翻訳(語ることと解せよ)は、他のいかなる翻訳にも増してタペストリーの裏側と一致し、

「素材は示すが、職人の技を示さない」

あるいは水で満たされた器の中に眺められる日蝕と一致する。(Hamann-1, II, p.199)<sup>7</sup>

### 2.3 翻訳と発話(Reden)

今引用した箇所でも最も強調されているのは、「翻訳すること」(übersetzen)、「記号」(Zeichen)、「日蝕」(Sonnenfinsternis)の3語である。「語るとは翻訳することである」と同じ文字サイズで書かれているのを読むのとは、全く異なった印象を受ける。音声言語に抑揚があるように、ハーマンはサイズの大小によって文字言語による抑揚をつけようとしたようだ。これもまた音声言語から文字言語への「翻訳」の試みといえるかもしれない。

最初の部分(a)では、発話行為(Reden)とはすなわち翻訳の行為であるという。「天使のことば」(Engelsprache)のカテゴリーに入るのは「思考」(Gedanken)、「ことがら」(Sachen)、「形象」(Bilder)であり、「翻訳」される側の「人間の言語」(Menschensprache)のカテゴリーには「ことば」(Worte)、「名称」(Namen)、記号(Zeichen)が分類される。ハーマンがある書簡で「我々の魂の目に見えない存在はことばを通して自らを啓示する — 創造が語りであるように」(Hamann-2, I, p.393)と綴り、同様に『美学提要』の直前の段落でも天地創造を神の語りとして捉えている(Hamann-1, II, p.198)ことから、人間の理解や理性を越えた、根源的なことばの存在をハーマンは前提とし、そこからの翻訳として人間の言語を位置づけている。しかし、『美学提要』のこのパッセージでは「神のことば」とは言わず、ギリシャ神話でいえばヘルメスのように神のことばを人間に伝える「天使のことば」から人間の言語への翻訳とする。それは、思考やことがらや形象として認識され知覚されている状態は、すでに神から離れた状態だからだろうか。根源的な音声言語である発話行為(Reden)から人間の言語へと翻訳された「ことば」、「名称」、「記号」は、神から更に離れているということになる。そうだとすれば、ここで用いられている「翻訳」という言葉は、神と人間との間の距離感を表す概念として機能している。ミヒャエリスが人間の理性や言葉を通して聖書を理解できるとするのに対し、ハーマンは人間の理性や言語からは捉えきれない神の存在を、オリジナルと目標言語との遠さをあらわす「翻訳」概念を用いて指し示したのではないだろうか。その点では、この文における「翻訳」概念からは、翻訳はオリジナルそのものではあり得ない、という立場をハーマンが支持することになる。

次の部分(b)では、セミコロン後に「これらは」と受けて、「人間の言語」に属する「記号」(Zeichen)の説明を展開する。初版で文字が強調されている部分のみ拾い出すと、記号は「詩的、

「歴史記述的」、「哲学的」でありうるという。この文脈ではどれも人間の知的行為を表す形容表現である。人間が創造的に言語を用いて表現しようとする「詩」、語源も含めて過去の出来事を言語で記述しようとする「歴史記述」、人間の思考により概念システムを構築し、その尺度によって現実を言語化しようとする「哲学」、ここではいずれもそれ自体を絶対視できないものとして列挙される。これもまた、ミヒャエリスへ向けられた批判と考えるとよいだろう。

#### 2.4 「タペストリーの裏側」

最後(c)の部分に注目する。初版では、この部分の「翻訳」(Übersetzung)という語に強調はほどこされず、「語ること」(Reden)の方だけが強調されている。つまり、翻訳としての言語活動そのものについて問題としている、ということがここでより明確になる。そして、2つの比喩が持ち込まれる。ひとつ目は「タペストリーの裏側」(die verkehrte Seite von Tapeten)、そしていまひとつが「日蝕」(Sonnenfinsternis)である。いずれも具体的な事象がそのまま比喩として持ち込まれていることで、読者に解釈の余地が確保される。では、「裏」の面と強調されているタペストリーとは何のことだろうか。これはハーマンによるオリジナルの比喩ではない。『美学提要』の原文で出典は明示されておらず、注解書や研究書でも言及されていないが、ハーマンも好んで読んだ(Hamann-1, VI, p.91)セルバンテスの『ドン・キホーテ』からの引用だろう<sup>8</sup>。翻訳としての言語化によって見えるのは継ぎ接ぎされた素材に過ぎないということになり、これもまた「翻訳の不完全性」(Patri 1996, p328)を示す。同様の内容が、直後に英語の著作から原語のまま本文へと継ぎ接ぎした引用で語られる。「素材は示すが、職人の技を示さない。」こちらは、1717年にロンドンで出版されたロスコモン伯爵による文で、ホラティウスの散文訳に関するコメントである<sup>9</sup>。翻訳としての言語化で明らかになるのは部分的なものに過ぎず、本質的なことは隠されたままだということだ。ふたつ目の比喩、「日蝕」(Sonnenfinsternis)も、太陽そのものではなく、間接的に水面に映った太陽を眺める点で、目で見ているものは本質そのものではない、という比喩となる。

以上のことから、『美学提要』の翻訳概念は、その著作が向けられた名宛人であるミヒャエリスの理性主義的聖書解釈を批判するために用いられている、とまとめることができるだろう。人間の言語へと「翻訳」された聖書を読み解くためには、その目標言語の分析のみに拘泥しても、オリジナルであるところの神の啓示そのものに近づくどころか遠のいてしまう。こうした批判をするために、ミヒャエリスが否定的に捉えた「ラプソディー」のスタイルを自らの著作でもあえて取るのが、ハーマンの戦略だったと考えられる。

### 3 ハーマンの「翻訳」概念と「へりくだり」のコミュニケーション

#### 3.1 『聖書考察』

では、ハーマンにとって「翻訳」とは、オリジナルの起点言語と翻訳先の目標言語との距離の遠さや食い違いしか意味しないのだろうか。この問いには2つの点から慎重に答える必要がある。第1に、『美学提要』ではミヒャエリス批判のために翻訳の「不完全性」が強調されることになったが、ハーマンが著作や書簡において常に同じ意味で翻訳概念を用いているわけではないからだ。たとえばさまざまな相手に宛てた書簡においてだけでもハーマンの翻訳観は多様で、「万華鏡」(Patri 1996, p.33)という比喩が用いられるほどである。文脈に応じ、相手に応じ、アプローチの方法を工夫するハーマ

ン独特の現象だと言えよう。第2に、起点言語と目標言語との遠さ、翻訳の不完全性が語られている時でも、ハーマンにおいては、それがたんなる悲観論とはならないからである。その根拠は、人間のもとへと「降りてくる神」への信仰である。これがハーマンの著作の中心概念である「へりくだり」の思想の基盤となっている。この第2の点について、ここでは「バベルの塔」に関するハーマンの解釈を手がかりとして検討したい。

創世記第11章に記されたバベルの塔の物語について、ハーマンはロンドンでの聖書読解を通しての回心に際して記した『聖書考察』(„Biblische Betrachtungen eines Christen“)で次のように綴っている。

人間による企てを阻もうとする神の強い思いを書き表すのに、モーセは言葉によって記述したが、それは人間が自分たちの熱意を表現する場面でモーセが用いたまさにその言葉によってであった。皆来たれ——。神は複数形によって自らを表している——それは、この一致団結した民に対峙するためである。来たれ、と神は述べる。我々は天から降っていこう。下りていこう。これこそ、我々が天に近づいた、その手段である。この地上への神のへりくだり。先端が天にまで届く理性の塔でもなく、煉瓦や漆喰によって我々が名を成す必要があったり、その旗が混乱した人々の象徴となったりするような塔でもなく。皆が自分の言葉を理解したが、他人の言葉は誰も理解しなかった。デカルトは自らの理性を、ライプニッツは自分の理性を、ニュートンは自分の理性を理解したが、そのため、自分たち同士ではよりよく理解している。彼らの概念を区別するためには、我々は彼らの言語を理解しなくてはならない。我々は彼らの素材を精査しなくてはならない。我々は彼らの教説という建物や彼らの基礎や彼らが目指している結末や彼らが切り上げようとしている出口を調べなければならない。これは彼らが我々に原則や経験や結論として背負わせるような期待や予断にしたがってではなく。(Hamann-4, p.88)

### 3.2 バベルと「へりくだり」

この解釈で着目すべき点は2つある。ひとつ目は、神がバベルの塔の建設をやめさせるために天から降りてくる(sich herunterlassen)という聖書の記述についての解釈である。ハーマンは、バベルの塔の建築を阻止した神を、人間の傲慢さを罰する裁きの神ではなく、恵みの神としてポジティブなイメージで捉えている。神が自らのことを指して複数形で「我々」と言うのは、大勢で団結している人間に合わせたから、つまり神が人間に適合するためだという。その神が自ら地上へ降りてくることは、すなわち人間が「天に近づく」ことだとハーマンは解釈している。旧約聖書のバベルの塔の物語で起きた「この世への神のへりくだり」(「この地上へと神が降りてくること」, „Die Herunterlassung Gottes auf diese Erde“)は、神が人間イエスとして地上に現れ、人間の罪を贖うという新約に書かれた救いの出来事へと結びつけて予型論的に解釈される。

次に着目すべき点は、バベルの塔がデカルトやライプニッツなどの思考システムに代表される「理性の塔」に喩えられていることだ。それぞれの概念や言語の体系の各々がいわば「バベルの塔」であり、そこでは「自分の言葉を理解」しても、「他人の言葉は誰も理解」しない。これは他言語だけでなく同一言語においてもまた起こりうる現象だということになる。そうした「バベルの塔」を壊すのが、神が人間とコミュニケーションするために人間へと適合する「神のへりくだり」という恵みの手段である。

ハーマンのこの解釈によれば、バベルの塔の物語は、人間の言語の多様性を説明する翻訳起源神話ではない。むしろそれは、独立し閉ざされた体系を要請する理性による思考システムに対し、解釈としての翻訳を促すコミュニケーション起源神話だと言えよう<sup>10</sup>。

#### 4 結び

オリジナルの起点言語と翻訳先の目標言語との距離が「天」と「地」ほど遠かろうと、それぞれの「バベルの塔」の間で食い違いがあろうと、その違いを克服することは不可能ではない。その根拠が、人間同士の関係を神と人間との関係のアナロジーで捉えた「へりくだり」の思想 (Kondeszendenzgedanke) である。神は人間のところへ降りてきて、イエスという人間の姿となり、人間が理解できるように人間の言語を通して聖書という形で「へりくだり」(Herunterlassung) により自らを啓示した (Hamann-4, p.59/ p.151)。同じように、人間も他者を理解するためには、自分の言語へ他者を移し置くことではなく、他者の言語へと自らを移し置くこと (sich über-setzen) が必要となる。その点で、「翻訳 (Übersetzung)」とは、ハーマンがその聖書解釈において基軸とする「神のへりくだり」の行為そのものなのである。

#### 【著者紹介】

宮谷尚美 (MIYATANI Naomi) 国立音楽大学准教授。立教大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士 (文学)。専門は 18 世紀ドイツ語圏の言語論。

#### 【注】

1 ちなみにこの書は、ゲーテが 1775 年に、ヘルダーは 1778 年に翻訳している。ハーマンによる「雅歌」翻訳については以下を参照。cf. Bohnenkamp, Anne: „Lieber stark als rein“. Das Hoheslied Salomos in den Übersetzungen Johann Georg Hamanns, Martin Bubers und der *Einheitsübersetzung der Heiligen Schrift* von 1974. In: Gajek, Bernhard (Hrsg.): Die Gegenwärtigkeit Johann Georg Hamanns. Acta des achten Internationalen Hamann-Kolloquiums an der Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg 2002. Frankfurt am Main u. a. (Peter Lang) 2005, p. 335-355.

2 『美学提要』の日本語訳に際しては、ハーマン (2002) の川中子義勝訳を参照しつつ拙訳を試みた。

3 この「直接の対峙者」ミヒャエリスの他にも、モーゼス・メンデルスゾーンらの「聴衆」を意識した著作であることについては、川中子義勝『ハーマンの思想と生涯』(教文館) 1996 年、86 頁以下を参照のこと。

4 『愛言者の十字軍行』の目次 (N II, 118) には „Eine Rhapsodie in kabbalistischer Prose“ と初版のまま略されている。ロートによるハーマン著作集では、文字サイズのバランスは初版とほぼ変わらず、„Rhapsodie“ の文字が最も大きい。あえて言えば、初版よりも „AESTHETICA [...]“ の文字サイズが他との比較で大きくなっている。Vgl. Hamann's Schriften. Hrsg. von Friedrich Roth. Zweiter Teil. Berlin (G. Reimer) 1821, p. 255.

5 ナードラーによるハーマンの伝記でも、彼のハーマン著作集編纂の経緯や資料について記した書物の著作名索引でも常に „Aesthetica“ と略している。Cf. Nadler, Josef: Johann Georg Hamann. Der Zeuge

des Corpus mysticum. Salzburg (Otto Müller Verlag) 1949, p.127. Nadler, Josef: Die Hamannausgabe. Vermächtnis - Bemühungen - Vollzug. Halle (Saale) (Max Niemeyer Verlag) 1930, p. 207.

6 たとえば、伊狩裕「J.G. ハーマンの『裏返しの翻訳』をめぐる」[「ドイツ文学」98号、1997春、11-19ページ]、13ページ。『胡桃の中の美学』(=『美学提要』)におけるアナクロニズムや撞着によってしか語り得ない真理は「カバラの散文によるラプソディー」という装置によってはじめて語る事が可能になる、としているが、「ラプソディー」を「サブタイトル」と断定してしまわなければ更に説得力が増したであろう。

7 2種類の強調は日本語訳では下線によって再現した。二重下線がもっとも文字サイズが大きい。

8 「ある言語から別の言語への翻訳というのは、それが言語の女王たるギリシャ語・ラテン語からというのではないかぎり、フランドルの綴れ織りを裏から眺めるようなものだと私には思われます。もちろん模様の輪郭は見えているのですが、裏糸で遮られてしまって図柄がどのようなものかはっきりせず、表側の光沢なども見えなくなってしまうわけです。」ベルマン(2008), p277。

9 ハーマン(2002)、下。P.394 訳注参照。

10 ただし、ハーマンはその後の著作で「バベル」(Babel)の語を「言語の混乱」あるいは「言語が混乱した状態」という否定的な意味合いで用いている。その場合、連想されているのはバベルの塔の物語ではなく、むしろ、旧約聖書のなかで聖都エルサレムに対置されて神の意に背く町バビロンとの関連である。この点については Hamann-1, III, p.19, p.183, p.302 等を参照されたい。

#### 【参考文献】

Hamann, Johann Georg-1 (1949/1957). *Sämtliche Werke. 6 Bde.* (Historisch-kritische Ausgabe von Josef Nadler) Wien: Verlag Herder.

Hamann, Johann Georg-2 (1955/1979). *Briefwechsel. 7 Bde.* (herausgegeben von Walther Ziesemer und Arthur Henkel) Frankfurt am Main: Insel-Verlag.

Hamann, Johann Georg-3 (1821). *Hamann's Schriften.* Hrsg. von Friedrich Roth. Zweiter Teil. Berlin: G. Reimer.

Hamann, Johann Georg-4 (1993). *Londoner Schriften.* Hrsg. von Oswald Bayer und Bernd Weissenborn, München: C. H. Beck.

Nadler, Josef (1949). *Johann Georg Hamann. Der Zeuge des Corpus mysticum.* Salzburg : Otto Müller Verlag.

Nadler, Josef (1930). *Die Hamannausgabe. Vermächtnis - Bemühungen - Vollzug.* Halle (Saale): Max Niemeyer Verlag.

Patri, Kai Hendrik (1996). *Aus einer Menschensprache in eine Menschensprache. Zu Johann Georg Hamanns Hume-Übersetzungen.* In: Gajek, Bernhard (Hrsg.): Johann Georg Hamann und England. Hamann und die englischsprachige Aufklärung. Acta des siebten Internationalen Hamann-Kolloquiums zu Marburg/Lahn 1996. Frankfurt am Main u. a. : Peter Lang.

Bohnenkamp, Anne (2005). „Lieber stark als rein“. *Das Hoheslied Salomos in den Übersetzungen Johann Georg Hamanns, Martin Bubers und der Einheitsübersetzung der Heiligen Schrift von 1974.* In: Gajek, Bernhard (Hrsg.): Die Gegenwartigkeit Johann Georg Hamanns. Acta des achten Internationalen Hamann-Kolloquiums an der Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg 2002. Frankfurt am Main u.



a. : Peter Lang.

Lumpp, Hans-Martin (1970). *Philologia crucis. Zu Johann Georg Hamanns Auffassung von der Dichtkunst.*

Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

ハーマン (2002) 『北方の博士・ハーマン著作選 上/下』(川中子義勝訳) 沖積舎

川中子義勝 (1996) 『ハーマンの思想と生涯』 教文館

伊狩裕 (1997) 「J.G. ハーマンの『裏返し』の翻訳』をめぐって」『ドイツ文学』(日本独文学会) no.98 号

アントワーヌ・ベルマン (2008) 『他者という試練』(藤田省一訳) みすず書房

## Übersetzung bei J. G. Hamann

Naomi Miyatani

Das Übersetzen machte für Johann Georg Hamann (1730-88) zeitlebens zwar einen wesentlichen Teil seiner „Autorschaft“ aus. Ein Versuch jedoch, seine Übersetzungstheorie zu rekonstruieren, erfordert viel Vorsicht, weil ein genauer Blick auf seine in verschiedenen Kontexten entstandenen Texte, die bei bestimmten Gelegenheiten verfasst und an bestimmte Adressaten gerichtet sind, eher verhindert, eine umfassende Theorie aufzustellen.

Betrachtet man in den Hamannschen Texten stattdessen Übersetzungsakte sowie entsprechende Begriffe, zeigt sich eine Eigentümlichkeit im Zusammenhang mit seinen theologischen Gedanken. Dabei handelt es sich oft nicht um die Übersetzung zwischen bestimmten Sprachen, sondern vielmehr um die im hermeneutischen Sinne. Eine bedeutende Rolle spielt Übersetzung beispielsweise in seiner früheren Schrift „Aesthetica in nuce. Eine Rhapsodie in kabbalistischer Prose“(1762). Schon der Titel, in dem auf den ersten Blick kein Berührungspunkt mit dem Übersetzen zu finden ist, impliziert durch das Wort „Rhapsodie“, das im Text mit der Auslegungstätigkeit verbunden wird, einen Übersetzungsakt, mit dem auch die Offenbarung Gottes gemeint ist. Die wohlbekannt Passage „Reden ist übersetzen — aus einer Engelsprache in eine Menschensprache“ in „Aesthetica“ bezieht sich im ursprünglichen Kontext einer Auseinandersetzung mit dem rationalistisch orientierten Gegner Michaelis auf die nur schwer zu überbrückende Entfernung zwischen Gott und Mensch. Die Unvollkommenheit der Übersetzung zwischen Ausgangssprache und Zielsprache findet bei Hamann den Lösungsweg in seinem Kondeszendenzgedanken: Die Herunterlassung Gottes zu den Menschen lässt sich mit dem Übersetzungsakt vergleichen. Die Sprache der Anderen zu verstehen, heißt also, sich in Analogie zur Herunterlassung Gottes zu den Anderen *überzusetzen*.

※本研究は科研費(課題番号 22520324)の助成を受けたものである。

